

序

文学作品において語り手もしくは書き手がいかに設定され、どのような「語り narrative」が展開されているかということは、「ナラトロジー Narratology」の中心的な課題の一つであり、世界中のさまざまな物語・小説等にとって普遍的な問題でもある。『源氏物語』はしばしば「世界最古の長篇小説」などと呼ばれ、その古さと規模の大きさが世界的にも注目されてきたが、この物語テクストを解析してゆくと、語り手・書き手の設定とその語りの性質においてこそ、特筆すべき独自の工夫と創意が見いだされるだろう。

日本の物語文学研究では、一九八〇年代以降、さまざまな文学理論とともに、たとえばジェラルド・ジュネットなどのナラトロジーも紹介され、かつしばしば援用されるようになったが、『源氏物語』に関しては、はやくも十五世紀、室町時代から当時の注釈者たちが、現代の術語でいえば語り手の問題、あるいは語り手と作者との関係について、きわめて高度な分析を展開していた。さらに二十世紀半ば以降は、玉上琢彌の「物語音読論」の登場により、『源氏物語』の語りの仕組みなどがいっそう具体的に議論されてゆくようになる。

二〇〇四年刊行の前著『源氏物語の話しと表現世界』（勉誠出版）では、中世の古注釈から玉上琢彌を経て一九九〇年代にいたるまでの『源氏物語』のナラティブ研究を批判的にふまえつつ、重な

りあう「話声 narrative voice」に着目して論じた。すなわち、物語テクストにおいて、作中世界で見聞した出来事を語る女房たちの「言葉 discourse」、次いでその語りを書き記す人の言葉、さらにはその書かれたものを読む人もしくは書きする人の言葉、……というような物語伝播を示唆する言葉の重なりあいがかみとれること、さらにはテクスト内の物語伝播をひきうけるようにして、現実世界で物語を読む人、さらに書きする人などがつらなつてゆくという具合に、物語世界と現実世界とが複数の話声の重なりの中で結ばれるよう仕組まれていることなどをとらえた。

他方において、『源氏物語』千年紀といわれた二〇〇八年には、「物語音読論」前後から現代に至るまでの『源氏物語』に関する「語り手・書き手・作者」をめぐる学説史について吟味するという機会を得た（「語り」論からの離脱）『テーマで読む源氏物語論第3巻 歴史・文化との交差／語り手・書き手・作者』勉誠出版）。

本書は、右のようなかつての拙稿などをふまえつつも、より新たな視座から、またより精密に、『源氏物語』における女房、書かれた言葉、そして引用を主たるテーマとして、『源氏物語』が織りなす言葉の世界の深みとひろがりの両面に踏み込んでゆこうとしている。そのめざすところを端的に述べるならば、『源氏物語』の語りもしくは言葉の達成しているところを見きわめようということである⁽¹⁾。全体は、I～IVの四部構成とする。

まず「I 女房たちの関与する物語」では、『源氏物語』における女房たちに着目する。なお、本書のII～IVの各章でも女房たちへの注視が繰り返されることだろう。ここで、そうした姿勢をとる理由について述べておく。そのポイントは、次の三つに集約されよう。

- a 『源氏物語』は女房たちが語り伝え、さらに書き記すという体裁をとっている。
- b 女房たちの言動こそが主要人物の人生の転変に大きく関わる。
- c 女房たちは、主要人物と目される女性と連続する面をもつ。

このうちaは、『源氏物語』の語り手と書き手に関わる。この物語では、音声により語り伝える女房が複数設定されている。さらに、その音声の物語を書きとどめたり、編纂したり、またそこから書写したりする女房たちの存在も、物語本文中に刻印されている。前著『源氏物語の話しと表現世界』ではまさにその点を中心に扱ったが、それを受ける本書、Iの「第一章 『源氏物語』の多種多様な「読者たち」と享受」では、ロジェ・シャルチエの「読者」論に学びつつ、「テクスト」概念に対応する「読者」像、および「物語音読論」のいう「真の読者」像のいずれをも批判した上で、『源氏物語』の生成・成り立ちの「読者」の中にふくまれる女房たちと、物語内の女房たちとの「照応 correspondence」をとらえようとする⁽²⁾。

次に、「第二章 『源氏物語』の「いろ」と女房たち——「いろごのみ」論、〈王権〉論のあとに——」は、右のbをふまえた論考である。すなわち、女房たちの隠微な言動こそが物語を決定的に動かしているのではないかという予想から、光源氏の「いろごのみ」ではなく、女房集団が本来的に有しているとおぼしい「いろごのみ」性が物語の生成をもたらしているというところを提示する。また、「第三章 玉鬘と弁のおもと——求婚譚における「心浅き」女房の重要性——」では、玉鬘の命運を決定づけるはたらきを示した女房として「藤袴」「真木柱」巻に登場する弁のおもとに注目し、あ

わせて、諸注釈の見解が割れている箇所の正確な解説には、端役にすぎない弁のおもとの重要性の認識が欠かせないということ論じる。

一方で先のc、主人格の女性と女房たちとの連続面については、単に代理的に機能しているということだけでなく、女君または姫君と、上臈の女房たちとの間に身分・待遇上の連続面がみられるということを「第四章 主人格の女性と女房たちとの間」で論じる。さらに、主要人物の中でも、その属性として女房との連続面が看取される例として、「第五章 朧月夜の君論——女房たちとの連続性——」で朧月夜の君の場合をとりあげてみる。

つづいて、「II 物語の言葉・語り手・手紙」では、口頭で語り伝えられ、また朗読されることが強調されがちであった『源氏物語』の叙述だが、実は和歌をふくめて、手紙のように書かれた言葉をルーツとしているケースが多いこと、またそれが引用されたり人々の間で共有されたりしていたということをとらえてみよう。ここで重要なのは、作中の女房たちが積極的に物語の中で書かれた言葉に関与しているという点である。女房たちは、主人格の人物に宛てられた手紙を共に読み、また女主人の代筆でやりとりにも参画するのである。

そもそも仮名による手紙こそが、物語文学の叙述に親近する上、和歌などを伝達する媒体としても重要であることに鑑みて、IIの第一章以下、四つの章においては、手紙論を展開してみる。「第一章 自らの言葉を処分する仮名文書——平安時代の和文——」は、『竹取物語』、日記文学作品などにも共通してみられる手紙の処分に関わる文言から、平安時代の和文Ⅱ仮名書きの文書の特性を探る試みである。次の「第二章 『源氏物語』の言葉と手紙」と「第三章 語り手の言葉に先立つ手

紙——「須磨」および「朝顔」巻の例から——」では、女房による語りの前提となる情報として、書かれた言葉としての手紙があるということを明らかにしてゆく。さらに、「第四章 「梅枝」巻の書、書物と手紙——「雨夜の品定め」との照応——」は、明石姫君の入内の準備にあわせて六条の院のもとに傑出した書と書物が集められるということに注目しつつ、手紙と書と物語との緊密なつながりについて論じる。

つづいて第五章と第六章は、物語の第一部の終幕、「藤のうら葉」巻に限定した分析を中心とする。「第五章 同語反復表現の諧謔性と志向性——「藤のうら葉」巻論(一)——」では、徹底的かつ多様に同語反復を重ねるこの巻の言葉において、諧謔性を示しつつ、一方では「光」「紫」といった単語の反復が物語終盤にあつて意図的になされていることなどを明らかにしてゆく。「第六章 語り手たちと和歌の共同性——「藤のうら葉」巻論(二)——」は、『源氏物語』の言葉の特性について、特に語り手たちに近い立場にあると目される夕霧の乳母の詠歌から、語り手たちと和歌をめぐる共同性に迫ろうとする。これにつづく「第七章 和歌を詠まない人々」は、作中で和歌を詠まない人物に注目することによって、逆説的に作中和歌の特性をとらえてみようという試みである。また、それとあわせて、歌を詠まない女房たちという媒介者による物語の生成についても、検討する。なお、このII—第七章をやや簡略化した論文の英訳を本書末尾に「付章」として掲載している。

次に、「III 「引用」と言葉のネットワーク」では、最古の古注釈書『源氏釈』以来、現代にいたるまで盛んに論じられてきた『源氏物語』の「引用」の問題を扱う。しかし、標準的な引用とはあげない。ここでは、女房たちの媒介による物語生成ということを意識しつつ、一般的な引用とは

見なされないような、かなり微妙な事例を積極的にとりあげている。まずは「第一章 『源氏物語』とその同時代文学における「引用」の再検討」において、『源氏物語』が「古代文学」とはいいがたいことを確認した上で、この第一章、ならびに「第二章 『伊勢物語』と『源氏物語』をつなぐ古注釈——的はずれにみえる注記のみなおし——」と「第三章 古注釈の示唆する『源氏物語』の和歌的表現——古歌の「引用」——」において、ごく一部の古注釈のみが指摘している、単なる単語レヴェルの一致に過ぎないような『伊勢物語』との関わりを多角的に検討してみたい。その結果、平安時代中期の和文の世界における言葉のネットワークが、想像以上にきめ細かなものであった可能性がみえてくることだろう。それを作者のレヴェルで考えるならば、同時代の言葉のネットワークを活用した「操作」ということも想像されるだろう。

つづく「第四章 『白氏文集』引用における変換の妙——「篝火」巻の場合——」は、「玉鬘十帖」における白居易の漢詩引用をとりあげるが、特にこれまでの大半の注釈が引用と認定しなかった「篝火」巻の例にもとづき、白詩の主題から大きく変換させつつ、表現上の重層的な照応を図ろうとする、『源氏物語』の漢詩引用の特性をとらえてみよう。

次いで、「第五章 帝の葬送儀礼——桐壺院の「御国忌」をめぐって——」では、「賢木」巻にみえる「御国忌」の意味を精密に検討した上で、桐壺院の醍醐天皇准拠説などとの関わりをおさえる。あわせて、作品世界内では「御国忌」を朱雀帝がとりおこなっているものの、朱雀帝による追善供養が万全ではなかったことを示唆していると読み解かれるだろう。

最後の「IV 「宇治十帖」の言葉」は、本書のⅠ・Ⅱなどと共通する問題意識から「宇治十帖」

の物語を対象として論じた四つの章からなる。「宇治十帖」では、語り方、叙述のあり方など、巻ごとにおいて実験的に新たな方法が開拓されているようだが、「第一章 「物語」の切っ先としての薫——「橋姫」「榎本」巻の言葉から——」では、「橋姫」「榎本」の二巻に範囲を絞って、二度にわたる垣間見、薫の自己認識を示す箇所などをとりあげ、この男君が、自らの出生に関わる「昔物語」にこだわりつつ、他方において今まさに進みつつある宇治の姫君たちとの「物語」の、いわば切っ先に相当するような位置にあるという特質をとらえる。「第二章 「総角」巻の困惑しあう人々——「いとほし」の解釈をめぐって——」は、別稿で検討している形容詞「いとほし」の解釈にもとづき、「総角」巻の前半部などで頻用される「いとほし」を、いずれも困惑もしくはつらさをあらわす語と解する。その場合、「総角」巻の大君、中の君、薫の三者は、いずれも自己完結的、利己的な面を示しているという、これまで見えていなかった関係が浮かびあがってくることだろう。つづく「第三章 弁の尼を超える薫——「宿木」「東屋」巻の言葉から——」では、特に延々と語られる「宿木」巻の薫の三度めの垣間見と次の「東屋」巻に関する分析から、物語それ自体と密接に関わる弁の尼、薫の両者が機能的に交錯しつつ、結局は語り手により近いとおもわれる弁の尼をも超越してゆく薫が、新たな「物語」を始動させるような位置にあるということを論じてゆく。

最後の「第四章 浮舟と小野の妹尼——「手習」「夢浮橋」巻の言葉から——」では、物語最後の女主人公が「手習」「夢浮橋」巻の「語り手」と目されたり、さらには物語作者へと転じてゆくような位置にあるといわれたりしてきたものの、両巻の言葉を丁寧解析した結果として、浮舟以上に小野の妹尼こそが語りに関わる注目すべき人物であるということを論じる。なお、妹尼は女房たち、

それに語り手、読み手たちにも連なる存在であり、また浮舟に対して過剰に密着しつつ、物語そのものにも密着するような面をもつだろう。

『源氏物語』は既に多くの言語に翻訳され、世界文学として多くの読者を獲得し、また世界各地の多数の日本文学研究者の研究対象となっている。この物語作品そのものがグローバルに展開してきたともいえるわけだが、本書は、世界の文学研究、特にナラトロジーなどが扱う語り手と語り手に関する議論などを意識した上で、『源氏物語』の本文それ自体が有している、語り、語り手・書き手などの特殊性、そして先駆性を明らかにしてゆこうとするものである。

注

(1) このような課題に向きあう際、『源氏物語』をふくむ平安時代の和文の人称の問題について検討することは不可避であろうが、本書においてその検討をとりこむことはできなかった。ただし、現時点での稿者の考えは、拙稿「ナラトロジーのこれからと『源氏物語』——人称をめぐる課題を中心に——」(『新時代への源氏学 第9巻 架橋する〈文学〉 理論』竹林舎、近刊予定)で述べている。あわせて参照されたい。

(2) 『源氏物語』の生成・成立に際しては、物語作者とみられてきた紫式部のみならず、その周辺の中宮彰子付き女房できわめて近い者たちなどの関与を積極的にみとめてゆくべきではないか、と考えはじめているが、本書においてそのような考察をとりこむことはできなかった。なお、この点については、拙稿「藤式部丞と紫式部——『源氏物語』における作者の自己言及——」(『文学』隔月刊一六一一、二〇一五年一月)である程度は言及している。

目次

序……………(1)

凡例……………(20)

I 女房たちの関与する物語……………1

第一章 『源氏物語』の多種多様な「読者たち」と享受……………3

はじめに……………3

一 「読者」をめぐる近年の議論……………4

二 「真の読者」とは誰か？……………7

三 『源氏物語』の内部にみえる享受……………14

四 さまざまな「読者たち」と「主題」——むすびにかえて……………17

第二章 『源氏物語』の「いろ」と女房たち——〈いろごのみ〉論、〈王権〉論のあとに……………22

はじめに——〈いろごのみ〉論と〈王権〉論について……………22

一 『源氏物語』の中の「いろごのみ」と「いろごのみ」……………26

二 『源氏物語』の中の「いろ」……………	30
三 女房たちの導く「いろ」……………	35
四 周縁から生成する物語——むすびにかえて——……………	39

第三章 玉鬘と弁のおもと——求婚譚における「心浅き」女房の重要性——

はじめに……………	44
一 玉鬘をめぐる物語の枠組みと、右近のこと……………	45
二 玉鬘付きの女房たちの語られ方……………	47
三 「真木柱」巻の巻頭で示される弁のおもとの働き……………	50
四 玉鬘求婚譚を決定つけた女房たち——むすびにかえて——……………	55

第四章 主人格の女性と女房たちとの間……

はじめに……………	58
一 「明石の御方」が「明石の君」もしくは「明石」と呼ばれるとき……………	60
二 正篇における姫君たちのありえたかも知れない姿……………	65
三 下降する姫君——宮の君の場合——……………	67

四 浮舟のもつ二重性……………	69
五 享受の問題へ——むすびにかえて——……………	73

第五章 朧月夜の君論——女房たちとの連続性——

はじめに……………	76
一 光源氏と女房たちの「いろ」……………	78
二 朧月夜の君と女房たちとの連続面……………	81
三 朧月夜の君から読者たちへ——むすびにかえて——……………	87

II 物語の言葉・語り手・手紙……………

第一章 自らの言葉を処分する仮名文書——平安時代の和文——

はじめに……………	93
一 「手紙」物語自身の言葉——最後に処分する話……………	94
二 『源氏物語』における言葉の「旅」……………	98
三 『土左日記』と『紫式部日記』における仮名文書の処分……………	100
四 ウロボロスとしての仮名文書——むすびにかえて——……………	102

第二章 『源氏物語』の言葉と手紙

- はじめに……………107
- 一 『源氏物語』の手紙に関するこれまでの論議……………109
- 二 「幻」および「浮舟」巻における手紙の処分と女房たち……………112
- 三 「夢浮橋」巻における手紙の引用……………119
- 四 手紙に基づいて語ること——むすびにかえて……………124

第三章 語り手の言葉に先立つ手紙——「須磨」および「朝顔」巻の例から——

- はじめに……………130
- 一 「須磨」巻における語り手以前の言葉……………131
- 二 「朝顔」巻における語り手以前の言葉……………136
- 三 文字と紙——むすびにかえて……………141

第四章 「梅枝」巻の書、書物と手紙——「雨夜の品定め」との照応——

- はじめに……………144
- 一 「梅枝」巻における「雨夜の品定め」との照応……………147

第五章 同語反復表現の諧謔性と志向性——「藤のうら葉」巻論(二)——

- はじめに……………171
- 一 『源氏物語』の眼目の語、語脈、同語反復等々……………173
- 二 「藤のうら葉」の巻頭部からの同語反復……………175
- 三 藤花の宴と六条の院行幸における同語反復……………186
- 四 「光源氏の物語」もしくは「紫の物語」としての「藤のうら葉」巻……………206
- 五 同語反復の効果と意義——むすびにかえて……………212

第六章 語り手たちと和歌の共同性——「藤のうら葉」巻論(二)——

- はじめに……………216
- 一 『源氏物語』の言葉に関わる問題点……………218
- 二 「藤のうら葉」巻における宰相の乳母の和歌と老女房たち……………221
- 三 『源氏物語』の語り手たちと和歌をめぐる共同性——むすびにかえて……………227

第七章 和歌を詠まない人々

はじめに……………233

一 二種の歌わない人々……………234

二 歌わない主要人物たち……………236

三 歌わない帝……………242

四 歌に関与する女房たちと物語の生成……………244

五 歌わない人々の関与する物語——むすびにかえて……………248

III 「引用」と言葉のネットワーク……………253

第一章 『源氏物語』とその同時代文学における「引用」の再検討……………255

はじめに……………255

一 「引用」をめぐる議論の展開と再検討の方向……………256

二 『源氏物語』は「古代」の文学か？……………257

三 「引用」とは呼びがたいような「引用」……………261

四 新たな「引用」論へ——むすびにかえて……………265

第二章 『伊勢物語』と『源氏物語』をつなぐ古注釈——的はずれにみえる注記のみなおし……………268

はじめに……………268

一 『伊勢物語』から『源氏物語』への「変換」……………269

二 単語の一致か、それとも大胆な「変換」か……………272

三 言葉のネットワーク、もしくは物語作者の〈遊び〉……………282

四 的はずれにみえる注記の示唆する課題——むすびにかえて……………285

第三章 古注釈の示唆する『源氏物語』の和歌的表現——古歌の「引用」……………289

はじめに……………289

一 式部卿宮の大北の方が「ののしり」つづける言葉……………291

二 大北の方と「紫」の歌……………293

三 「あだ人」の恋の終わりを示唆する和歌……………299

四 古歌の「引用」のひろがり——むすびにかえて……………304

第四章 『白氏文集』引用における変換の妙——「篝火」巻の場合……………309

はじめに……………309

第七章 和歌を詠まない人々……………233

はじめに……………233

一 二種の歌わない人々……………234

二 歌わない主要人物たち……………236

三 歌わない帝……………242

四 歌に関与する女房たちと物語の生成……………244

五 歌わない人々の関与する物語——むすびにかえて……………248

III 「引用」と言葉のネットワーク……………253

第一章 『源氏物語』とその同時代文学における「引用」の再検討……………255

はじめに……………255

一 「引用」をめぐる議論の展開と再検討の方向……………256

二 『源氏物語』は「古代」の文学か？……………257

三 「引用」とは呼びがたいような「引用」……………261

四 新たな「引用」論へ——むすびにかえて……………265

第二章 『伊勢物語』と『源氏物語』をつなぐ古注釈——的はずれにみえる注記のみなおし……………268

はじめに……………268

一 『伊勢物語』から『源氏物語』への「変換」……………269

二 単語の一致か、それとも大胆な「変換」か……………272

三 言葉のネットワーク、もしくは物語作者の〈遊び〉……………282

四 的はずれにみえる注記の示唆する課題——むすびにかえて……………285

第三章 古注釈の示唆する『源氏物語』の和歌的表現——古歌の「引用」……………289

はじめに……………289

一 式部卿宮の大北の方が「ののしり」つづける言葉……………291

二 大北の方と「紫」の歌……………293

三 「あだ人」の恋の終わりを示唆する和歌……………299

四 古歌の「引用」のひろがり——むすびにかえて……………304

第四章 『白氏文集』引用における変換の妙——「篝火」巻の場合……………309

はじめに……………309

一 『源氏物語』における「引用」の諸相…………… 310

二 「玉鬘」巻における新楽府「傳戎人」引用の場合…………… 312

三 「篝火」巻の本文と白詩との呼応…………… 317

四 白詩からの変換の妙——むすびにかえて…………… 325

第五章 帝の葬送儀礼——桐壺院の「御国忌」をめぐる——

はじめに…………… 332

一 物語文学における帝の死と葬送…………… 334

二 「国忌」とは何か…………… 336

三 「賢木」巻における桐壺院の「御国忌」…………… 341

四 「御国忌」ならびに桐壺院の准抛…………… 348

五 桐壺院の葬送と「雪」の関係…………… 352

六 桐壺院の「御国忌」と朱雀帝——むすびにかえて…………… 354

IV 「宇治十帖」の言葉…………… 361

第一章 「物語」の切っ先としての薫——「橋姫」「椎本」巻の言葉から——

はじめに…………… 363

一 近年の「宇治十帖」論、その展開と問題点…………… 364

二 薫の出生に関わる「昔物語」とその管理…………… 368

三 薫の自己認識と進行形の「物語」…………… 373

四 「橋姫」「椎本」巻における二人の姫君…………… 377

五 薫という、「物語」の切っ先——むすびにかえて…………… 382

第二章 「総角」巻の困惑しあう人々——「いとほし」の解釈をめぐる——

はじめに…………… 387

一 「いとほし」の語義に関して…………… 389

二 「総角」巻における「いとほし」の検討…………… 392

三 「いとほし」と「心苦し」…………… 405

四 「いとほし」と「へだて」の関係——むすびにかえて…………… 407

第三章 弁の尼を超える薫——「宿木」「東屋」巻の言葉から——	412
はじめに……	412
一 垣間見における薫……	414
二 「宿木」巻の垣間見へ……	416
三 弁の尼を超えてゆく薫……	422
四 「物語」そのものとしての薫——むすびにかえて——	428
第四章 浮舟と小野の妹尼——「手習」「夢浮橋」巻の言葉から——	432
はじめに……	432
一 「手習」「夢浮橋」巻における待遇表現の様相……	434
二 浮舟と妹尼の待遇表現……	436
三 妹尼と「物語」との密着度——むすびにかえて——	441
跋……	445
初出一覧……	448
索引……	453
付章 Waka in <i>The Tale of Genji</i> : Characters Who Do Not Compose Waka (Translated by Chi Zhang)……	左 9
英文要旨……	左 1